



IoT デバイスメーカー向けの Matter 標準の適用

AWS 規範ガイドンス



AWS 規範ガイド: IoT デバイスメーカー向けの Matter 標準の適用

Copyright © 2026 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは Amazon 以外の製品およびサービスに使用することはできません。また、お客様に誤解を与える可能性がある形式で、または Amazon の信用を損なう形式で使用することもできません。Amazon が所有していないその他のすべての商標は Amazon との提携、関連、支援関係の有無にかかわらず、それら該当する所有者の資産です。

Table of Contents

序章	1
目的	1
Matter について	3
Matter プロトコル	3
Matter の仕組みの概要	4
認証の利点	5
スマートホームコンシューマー向けの Matter 認定の利点	5
セットアップと統合管理の簡素化	5
音声制御の選択と柔軟性の向上	6
デバイスメーカー向けの Matter 認定の利点	7
エコシステム間での単一の認定	7
開発コストの削減	7
カスタマーサポートの簡素化	8
認定に関する考慮事項	9
IP 以外の接続プロトコル	9
ハードウェアの制限	10
お客様のエコシステム	11
デバイスタイプがまだ定義されていません	11
代替方法: ゲートウェイでのプロキシ	12
Matter とのクラウド接続	13
重要エンドポイントのクラウド接続による高度なデバイス機能の有効化	13
クラウド接続を必要とするユースケース	13
クラウド接続を有効にするアーキテクチャ	15
ゲートウェイが組み込まれたスマートホームハブ	15
既存の Matter ハブへのクラウド接続をオフロードする	15
エンドポイントでの直接クラウド接続	15
Bridging Matter と製造元のクラウドプラットフォーム	15
セキュリティ	17
デバイス認証	17
暗号化された通信	17
無線通信経路更新	18
Matter を使用した開発	19
Alexa の使用	19
プログラム: Alexa と連携	19

SDK: Alexa で Matter を開発する	19
キット: Alexa Ambient Home デベロッパーキット	19
エンドポイント: コミッシヨナブルエンドポイント	19
AWS Private CA Matter のサポート	19
Matter の DAC	20
ノード運用証明書 (NOC)	20
CRL 失効サポート (Matter バージョン 1.2 以降)	20
Matter のインフラストラクチャ	20
Java サンプル	21
Matter PKI コンプライアンスガイド	21
と のマネージド統合 AWS IoT Device Management	21
よくある質問	22
Matter のメンバーシップレベルを教えてください。	22
スマートホームコンシューマーは Matter からどのようにメリットを得ますか?	22
デバイスメーカーは Matter からどのようにメリットを得ますか?	22
Matter は Wi-Fi、Bluetooth、または Thread を置き換えますか?	23
ベンダー ID と製品 ID とは	24
Matter 認定が必要なデバイスはどれですか?	24
私の製品タイプは現在 Matter で定義されていません。Matter 認定を受けるには、どのような追加タスクに予算を立てる必要がありますか?	24
一部のデバイスは、ホーム Wi-Fi ネットワークに直接接続します。これらのデバイスは Matter 認定を受けている必要がありますか?	25
Matter の最新バージョンと新機能	25
リソース	26
AWS リソース	26
IoT 用 Connectivity Standards Alliance (CSA)	26
ドキュメント履歴	27
.....	xxviii

IoT デバイスメーカー向けの Matter 標準の適用

Tushar Patel, Vijay Ujjain, David Swalters, Amazon Web Services

2026 年 3 月 ([ドキュメント履歴](#))

[Statista](#) によると、世界中のスマートホームユーザーの数は、2029 年までに 19 億人を超えると予想されています。この急速な成長は、運用と管理の面で課題をもたらします。コンシューマーの観点からは、各デバイスベンダーには、そのデバイスベンダーに固有のアプリケーションを通じて、スマートホームデバイスをホームネットワークにオンボーディングするさまざまな方法があります。これにより、さまざまなベンダーのさまざまなタイプのデバイスの増え続ける配列を管理することが難しくなります。同様に、デバイスメーカーの観点から、スマートホーム製品をさまざまなエコシステムで認証すると、ビジネスプロセスのコストと複雑さが増します。たとえば、同じデバイスモデルに対して異なる SKUs が必要になる場合があります。魅力的なユーザーエクスペリエンスアプリを維持し、定期的な更新を提供するための追加のオーバーヘッドであり、より良い製品の構築と提供に重点を置いたりリソースを排除します。コンシューマーとデバイスメーカーの両方が、共通のスマートホーム相互運用性標準から恩恵を受けるでしょう。この標準により、複数のベンダーのデバイスは、シームレスで安全で信頼性の高い方法で相互運用できます。コンシューマーとデバイスメーカーの両方が、複数のベンダーのデバイスがシームレス、安全、確実に相互運用できるようにする一般的なスマートホーム相互運用性標準を採用することで大きなメリットを得ています。

[Matter](#) 標準は、スマートホームスペースのモノのインターネット (IoT) デバイスメーカーが、スマートホームシステムを接続する単一のプロトコルの約束を実際に実現するエキサイティングな機会から進化しました。この標準は、さまざまな製造元のデバイス間の互換性と相互運用性を向上させることを目的としています。Matter は、IoT デバイス、モバイルアプリ、クラウドサービス間の通信を可能にするオープンなスマートホーム接続プロトコルです。

目的

Matter 標準を製品に統合する場合、IoT デバイスメーカーは開発を開始する前にいくつかの課題に対処する必要があります。Matter は、相互運用性、セキュリティ、シンプルさ、信頼性、デバイスの将来の証明など、独自の IoT プロトコルよりも多くの利点を提供します。ただし、新規および既存の IoT デプロイの両方に Matter を統合するには、慎重な計画と戦略が必要です。製造元は、メリットを活用しながら落とし穴を回避するために、Matter コンプライアンスプロセスに関するガイダンスを必要としています。このガイドでは、IoT デバイスメーカーに Matter の導入に関する包括的なガイダンスを提供します。これには、戦略から実装までの明確なロードマップが含まれます。このガイドは Matter への移行を容易にし、スマートホームエコシステムに根付く、安全で相互運用可能で将

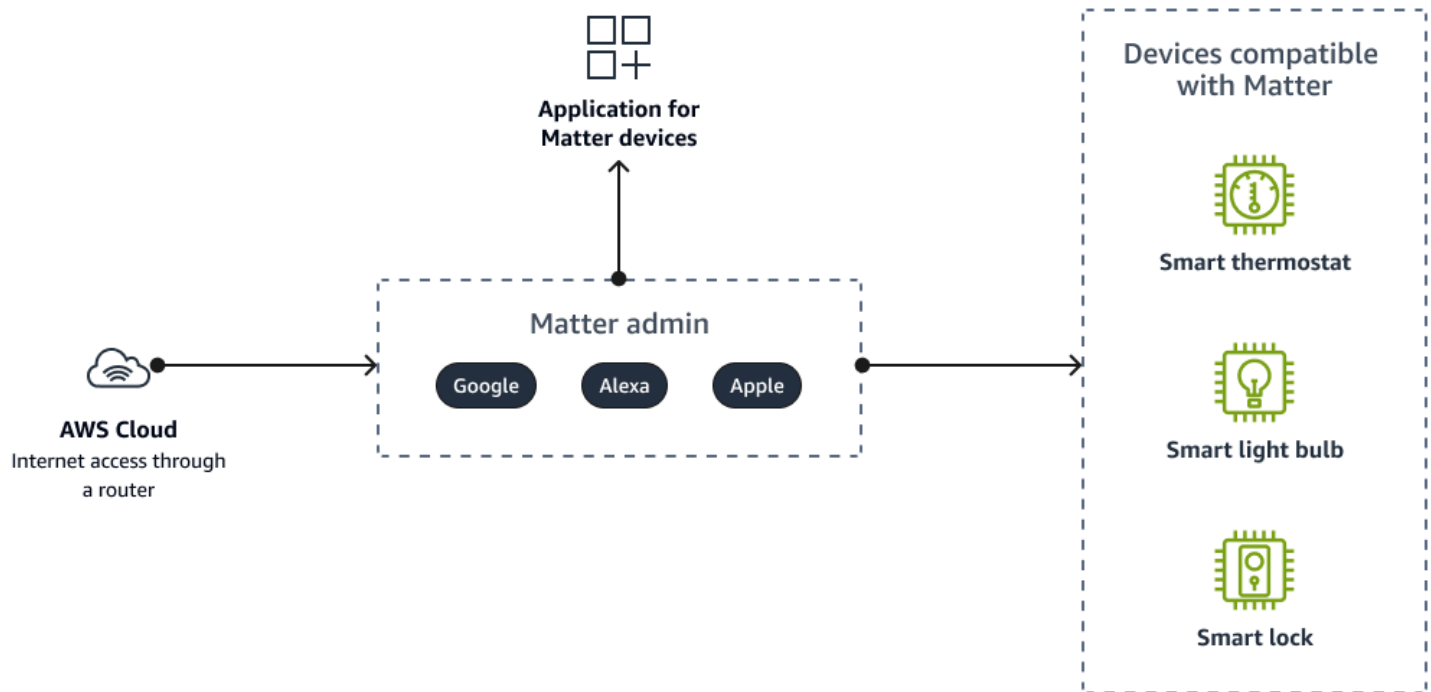
来を見据えた製品を構築するのに役立ちます。適切な戦略的アプローチにより、組織は Matter の導入のハードルを克服し、オープンスタンダードを採用する革新的な IoT デバイスを開発できます。

Matter 標準は、バージョン 1.5 で、スマートホームスペースにおけるモノのインターネット (IoT) デバイスメーカー向けの実証済みのソリューションに成熟しました。このオープンスタンダードは、さまざまな製造元のデバイス間の互換性と相互運用性が大幅に向上しました。Matter は、Amazon Alexa、Google Home、Apple HomeKit、Samsung SmartThings などの主要なエコシステム間で IoT デバイス、モバイルアプリ、クラウドサービス間の通信を可能にするオープンなスマートホーム接続プロトコルです。

Matter 1.5 では、初期リリース以降に拡張されたデバイスサポートが導入されました。これには、拡張されたエネルギー管理デバイス、ロボットバキューム、空気品質センサー、空気フィルター、カメラとセキュリティシステムのサポートの向上が含まれます。この標準では、マルチ管理者機能、コミッショニングフローの改善、セキュリティプロトコルの強化などの高度な機能も追加されました。何千もの認定された Matter デバイスが市場で利用可能になったことで、エコシステムは重要な規模に達し、市場競争力を求めるデバイスメーカーにとってはオプションではなく Matter の導入が不可欠です。

このガイドでは、デバイスメーカーが Matter の包括的な概要と Matter に準拠するために必要な手順について説明します。Matter 導入戦略を計画するための長所と短所を概説します。このガイドでは、既存のワイヤレスプロトコルを段階的にサポートしながら Matter を活用するためのベストプラクティスも提案しています。スマートホームソリューションを検討している IoT デバイスメーカーにとって、このガイドは接続戦略に役立ちます。

Matter 標準について



Matter プロトコル

Matter は、デバイス、モバイルアプリ、クラウドサービス間の通信を可能にするオープンなスマートホーム接続プロトコルです。Connectivity Standards Alliance (CSA) によって開発された Matter は、コンシューマーとメーカーの接続と相互運用性を簡素化します。Matter は、さまざまなスマートホームカテゴリをサポートしています。Matter は、コンシューマー向けに、オンボーディング、統合管理、エコシステム間の制御を提供します。製造元の場合、Matter は単一の証明書とアプリケーション開発を通じて開発コストとサポートコストを削減します。Amazon、Apple、Google などの多くの大企業が Matter の導入を推進しています。CSA は、組織の関与に応じて、主催者、参加者、アダプター、アソシエイトの 4 つの [メンバーシップレベル](#) を提供します。Matter は、強力な業界サポートにより、コンシューマーにブランド間のシームレスな接続を提供し、メーカーの開発を合理化することを目指しています。

Matter スマートホーム標準は、2025 年 11 月 20 日にバージョン 1.5 が導入されたことで大幅に成熟しました。標準では、カメラストリーミング、太陽電池、バッテリー、ヒートポンプなどのエネルギー管理システムのサポートが拡張されました。プロトコルレベルの進歩には、Thread の安定性の向上や TV デバイスの統合の向上が含まれます。

Matter の仕組みの概要

Matter は、ベンダーエコシステム全体のスマートホームデバイス向けの IP ベースのアプリケーションレベルのプロトコルです。IPv6 を使用するデバイスで動作します。概念的には、Matter は Matter エンドポイントであるネットワークノードのコレクションとして編成されています。Matter 用語の簡単な概要を次に示します。

- Matter デバイスは、電球、スイッチ、サーモスタット、ロックなどのスマートホーム製品です。
- Matter ファブリックは、すべてのデバイスが接続されている仮想ネットワークです。すべてのデバイスは同じ信頼されたルートを共有します。ファブリックはスターネットワークトポロジを形成します。
- Matter 管理者は、ファブリック上のすべてのデバイスのセキュリティと権限を作成、維持、管理します。管理者はハブまたはアプリケーションにすることができます。Matter にはマルチ管理者機能があり、Matter デバイスは同時に複数の抄録の一部にすることができます。たとえば、1 つの Matter デバイスを Amazon Alexa デバイスと Google Home デバイスの両方で管理できます。どちらも同じ物理ネットワーク上の Matter 管理者である可能性があります。
- Matter コミッショナーは、新しい Matter デバイスをファブリックにコミッショニング (またはオンボード) するデバイスです。これは、電話のアプリ、スマートホームゲートウェイ、または Matter 管理者です。
- Matter ブリッジは、非 IP プロトコルデバイスを Matter ファブリックに接続します。

Matter でハードウェアとソフトウェアが引き受けることができるさまざまなロールの詳細については、「[Peeking Under the Hood of Your Matter Smart Home](#)」(CSA ブログ記事) を参照してください。Matter バージョン 1.4 では、Home Router Access Protocol (HRAP) を使用した認証情報共有が改善された拡張マルチ管理者が導入されました。Matter バージョン 1.5 では、カメラストリーミングが導入されました。Matter バージョンは年に約 2 回リリースされます。

Matter による認証の利点

Matter は、スマートホームコンシューマーとそれを提供するメーカーの両方に大きな利点をもたらしました。スマートデバイスの共通言語を確立することで、Matter はセットアップの簡素化、プラットフォーム間の統合管理、音声制御の選択と柔軟性の拡張を通じて、以前に断片化された市場に成功しています。

コンシューマーにとって、この統一されたエクスペリエンスにより、スマートホームの構築と拡張の複雑さと負担が大幅に軽減されました。Amazon Alexa、Google Home、Apple HomeKit、Samsung SmartThings などの主要なエコシステムで何千もの認定された Matter デバイスが利用可能になり、相互運用性の約束が現実になりました。また、デバイスメーカーは、認証の合理化、開発コストの削減、カスタマーサポートの簡素化を通じて、有意義なメリットを実現しました。

Matter は 2022 年のリリース以降、複数のバージョンを通じて進化してきました。Matter バージョン 1.5 では、期待の厳しいカメラストリーミング機能を含め、50 を超えるデバイスタイプがサポートされるようになりました。この標準は市場で重要な質量に達しており、競争力を求めるデバイスメーカーにとってはオプションではなく Matter 認定が不可欠です。Matter は引き続き相互運用性を高め、スマートホーム導入の障壁を低く抑えるため、コンシューマーとメーカーの両方にメリットがあります。全体として、Matter 標準への認定は、以前は拒否していた問題を解決することで、スマートホーム市場の成長を加速しました。

トピック

- [スマートホームコンシューマー向けの Matter 認定の利点](#)
- [デバイスメーカー向けの Matter 認定の利点](#)

スマートホームコンシューマー向けの Matter 認定の利点

Matter はコンシューマーに大きなメリットをもたらします。Matter は、スマートホームデバイスが主要なプラットフォーム間でシームレスに連携するための共通言語を提供します。Matter でデバイスを認定することで、コンシューマーはスマートホームのセットアップと管理を簡素化し、デバイスの制御方法の柔軟性と選択性を高めることができます。

セットアップと統合管理の簡素化

コンシューマーが直面する最大の不満の 1 つは、さまざまなスマートホームデバイス进行操作して連携させるために必要な複雑なセットアップとオンボーディングプロセスです。各デバイスには、独

自のアプリと個別のアカウントが必要になる場合があります。この問題に対処するために、Matter は認定済みデバイスのplug-and-play機能を有効にしました。Matter 認定デバイスのオンボーディングは、デバイスをローカルホームネットワークに接続し、Alexa アプリなどの Matter 管理者を使用してデバイスの QR コードを読み取るのと同じくらい簡単です。Matter 1.4.1 では、マルチデバイス QR コードと NFC オンボーディングによる拡張セットアップフローが導入され、プロセスがさらに合理化されました。

この 1 つのアプリによる統一されたセットアップエクスペリエンスにより、コンシューマーは複数の個別のアプリをジャグリングしてさまざまなブランドのデバイスを管理する必要がなくなります。Matter 認定の照明、ロック、センサー、サーモスタット、カメラ、アプライアンス、エネルギー管理デバイスなどをすべて 1 つのインターフェイスから表示および制御できます。Apple HomeKit、Amazon Alexa、Google Assistant、および Samsung SmartThings ユーザーはすべて、個別の製造元アプリをダウンロードすることなく Matter デバイスを検出して制御できるという利点があります。統合システムによるスマートホームデバイスの管理を簡素化することで、コンシューマーの複雑さが軽減され、セットアップの構築と拡張の手間が大幅に軽減されます。

音声制御の選択と柔軟性の向上

音声制御は、コンシューマーがスマートホームデバイスとやり取りするための一般的な方法となっています。ただし、今日では、音声アシスタントの選択によって、音声で制御できるデバイスのブランドが決まります。Matter は、エコシステム間で音声制御を有効にすることでこれを変更します。

コンシューマーは、デバイスの互換性を気にすることなく、ニーズに最適な音声アシスタントエコシステムを柔軟に選択できます。Google Assistant に慣れているユーザーは、デバイスがもともと Alexa または HomeKit 市場向けに製造されていた場合でも、Matter 認定デバイスを音声で制御できます。

この音声制御の相互互換性により、よりオープンな環境が作成され、ユーザーはより多くの選択肢を得られます。単一のエコシステムとの互換性ではなく、機能と料金に基づいてデバイスを選択できます。ユーザーが将来音声アシスタントを変更する場合、すべてのデバイスが一般的な Matter 言語を話すため、既存のスマートホーム設定を簡単に移動できます。

Matter バージョン 1.4 で追加された拡張マルチ管理者機能を使用すると、1 つのデバイスを複数の音声アシスタントで同時に制御できます。つまり、家族は自分の好みの音声アシスタント (Alexa、Google Assistant、または Siri) を使用して、競合や追加セットアップなしで同じデバイスを制御できます。

デバイスメーカー向けの Matter 認定の利点

Matter 認定は、コンシューマーを支援するだけでなく、スマートデバイスメーカーにも有意義なメリットをもたらします。Matter 標準を採用することで、組織はコストを削減し、顧客のリーチを拡大する利点を得ることができます。Matter が 2022 年にリリースされ、バージョン 1.5 (2025 年 11 月) まで進化して以降、これらの利点はスマートホーム業界のメーカーによって実現されています。

エコシステム間での単一の認定

Alexa、HomeKit、Google Home、Samsung SmartThings などのエコシステム間で互換性を確保するために、メーカーは各組織で複数の長く高価な認定プロセスを経る必要があります。Matter は、単一の共通証明書を確立することでこれを変更します。

デバイスメーカーは、すべての主要なスマートホームエコシステムや音声アシスタントと互換性を保つために、製品を Matter 標準に一度認証するだけで済みます。これにより、開発が合理化され、ステータスクォーと比較して認定コストが大幅に削減されます。製品が更新されるにつれて、個別の証明書の維持にリソースを費やす必要がなくなりました。また、1 つの Matter 認定により、製品を将来にわたって保証し、新しいエコシステムが登場しても互換性を確保できます。

CSA は、認定ツール、PICS ツール、ZUTH などの優れたツールと、拡張されたテストプロバイダーネットワーク、相互運用性テスト施設を使用して、認定プロセスを改善しました。

開発コストの削減

Matter は、製造元の開発コストの削減にも役立ちます。共通の接続とセキュリティ標準を採用することで、組織は Matter プロジェクト全体に貢献する共有インフラストラクチャコンポーネントからメリットを得られます。

例えば、メーカーは独自の Thread ボードルーターを製品に含める必要がなくなり、この責任をハブメーカーにオフロードします。共有オープンソースドライバとライブラリは、冗長エンジニアリング作業をさらに削減します。一般的なサービス検出とデバイスセットアップメカニズムは、カスタムアプリケーション開発の必要性が低いことを意味します。これらのインフラストラクチャとアプリケーションの開発コストの削減は、より手頃な価格のスマートホームデバイスの形でコンシューマーに渡すことができます。

Matter SDK は初回リリースから大幅に成熟し、包括的な開発ツール、ライブラリ、ドキュメントが利用可能になりました。Matter バージョン 1.4.2 (2025 年 6 月) では、トランスポートの信頼性、BLE コミッショニング、PSA ベースの暗号化、およびテストインフラストラクチャが大幅に改

善されました。これらの機能強化により、早期導入フェーズと比較して統合の複雑さが軽減され、新製品time-to-marketが短縮されます。

Matter は、照明、ロック、サーモスタット、電化製品 (冷却器、ディッシュウォッシャー、オーブン、マイクロ波)、ロボットバキューム、エネルギー管理デバイス (ソーラーパネル、バッテリー、ヒートポンプ)、電気自動車の充電器、水管理デバイス、空気品質センサー、ストリーミングをサポートするカメラなど、バージョン 1.0 から 1.5 までの 50 を超えるデバイスタイプをサポートするようになりました。

カスタマーサポートの簡素化

スマートホーム市場での現在の断片化は、メーカーにとってカスタマーサポートの負担が大きくなります。コンシューマーは、トラブルシューティングに必要な接続、セットアップ、互換性の問題に頻繁に遭遇します。Matter は、コア関数を標準化することで、これらの問題を削減することを目指しています。

問題が発生した場合、基盤となる一般的な Matter プロトコルは、複数のエコシステムを考慮することなく、企業が接続の問題をより簡単に診断して解決できることを意味します。これにより、サポートプロセスが効率化されます。単一のアプリと一般的な音声互換性により、お客様はデバイスの使用を簡単に学習できるため、多くの場合、サポートの必要性が軽減されます。Matter によって簡素化されたカスタマーエクスペリエンスとトラブルシューティングにより、メーカーの長期サポートコストを削減できます。

認定戦略に関する考慮事項

Matter は、さまざまなスマートホームデバイスとプラットフォーム間の相互運用性を可能にします。ただし、Matter による認証は、デバイスメーカーにとって常に最適な選択肢であるとは限りません。デバイスタイプとユースケースによっては、実装と認定のコストが実用的または財務的に意味をなさない場合があります。このセクションでは、製造元が Matter で特定のデバイスを認証しないことを選択する主な理由をいくつか説明します。

Matter 標準は開発を簡素化し、ユニバーサルな互換性を実現することを目指していますが、特定のタイプのスマートホームデバイスは、利点を上回る認定への実践的な障壁に直面する可能性があります。Matter で厳格な制約、非 IP プロトコル、限られた対象者、または未定義のデバイスタイプを持つ製品の場合、最初は Matter 認定の取得が最善の戦略ではない可能性があります。これは、製造元が Matter の採用を避ける理由である可能性があります。ただし、Matter では、IP 対応ゲートウェイデバイスが IP 以外のエンドポイントをプロキシすることを許可しています。特定のレガシーデバイスの場合、ゲートウェイアプローチは、完全なデバイス再設計を回避しながら、Matter との互換性の実現可能なパスになる可能性があります。

2026 年の時点で、Matter がバージョン 1.5 になり、市場に数千の認定デバイスが存在するため、エコシステムは大幅に成熟しています。SDKs の改善、ドキュメントの改善、テストインフラストラクチャの拡大により、認定の障壁が軽減されました。ただし、以下に概説する考慮事項は、認証戦略を評価するメーカーにとって引き続き重要です。

Matter 標準が進化し、その範囲がより多くのユースケースをカバーするように拡大するにつれて、これらの製品カテゴリであっても、認定のケースは時間の経過とともに強化される可能性があります。デバイスメーカーは、特定の状況とロードマップを評価して、Matter コンプライアンスに関する最善のアプローチを決定する必要があります。多くの場合、少なくとも一時的に認定をオプトアウトする技術的な理由やビジネス上の理由があります。

IP 以外の接続プロトコル

Matter 標準を採用するには、デバイスは Wi-Fi、イーサネット、スレッドなどの IP ネットワークで動作する必要があります。Zigbee、Z-Wave、Bluetooth LE などの非 IP ワイヤレスプロトコルは、一般的に低帯域幅デバイスで使用されます。これらのプロトコルが Matter と互換性を持つには、IP から IP へのプロトコル変換機能を追加する必要があります。通信モジュールをアップグレードしたり、変換ゲートウェイを導入したりすると、通常、デバイスのハードウェアコストが増加します。

IP スタックのサポートを追加すると、ネットワーク処理により多くのメモリと処理能力を割り当てることができます。これは、非常に低コストで低電力のデバイスの機能を超える可能性があります。

す。IP をサポートするためにメモリまたはフラッシュを追加すると、製造コストが増加し、バッテリーの寿命も短縮されます。電源またはセンサーデータのオンとオフが必要なユースケースでは、非 IP プロトコルが効率的なソリューションを提供します。

Matter は基本的に、IP 以外の独自のワイヤレス標準に依存するデバイスの認証を除外します。これにより、バックエンド製品の代替接続方法を使用するメーカーが制限される可能性があります。Wi-Fi やイーサネットなどの IP ベースのプロトコルはさまざまなエコシステムをインターフェイスするために必要ですが、一部のアプリケーションでは、非 IP 標準にはまだセンサーとスイッチの基本的な接続のメリットがあります。

Matter ブリッジはより一般的で標準化されており、メーカーは認定されたブリッジ製品を通じて Matter の互換性を得ながら、既存の非 IP デバイスラインを維持できます。このアプローチは、単一のブリッジが複数のレガシーデバイスを Matter エンドポイントとして公開できる Zigbee および Z-Wave デバイスエコシステムで成功することが証明されています。

ハードウェアの制限

もう 1 つの課題は、Matter に必要なソフトウェアスタックをサポートするために、デバイス上の処理能力とメモリの最小レベルが必要であることです。ただし、最も基本的なスマートホームデバイスでは、コストとサイズの制約により、組み込みチップ機能が非常に限られていることがよくあります。

たとえば、シンプルなドアまたはウィンドウセンサーには、100 KB 未満のフラッシュメモリと 10 KB の RAM を持つマイクロコントローラーのみが含まれている場合があります。これにより、Matter を完全に実装するための十分なストレージと処理ヘッドルームが提供されません。より強力で高価なシリコンを追加すると、部品表が大幅に増加します。

コストとサイズが最優先事項である場合、メーカーは Matter の要件がハードウェア予算と一致しない場合があります。Matter を使用して非常に基本的なセンサー、スイッチ、またはコントローラーを認証すると、価格に影響を与える不要なハードウェアのアップグレードを強制する可能性があります。

Matter 1.4.2 (2025 年 6 月) では、リソース使用量を最適化したトランスポートの信頼性と Bluetooth Low Energy (BLE) コミッショニングが改善されました。SDK の成熟度とリファレンス実装の可用性により、Matter 統合のオーバーヘッドも削減されました。ただし、非常に制約の厳しいデバイス (100 KB フラッシュ未満) では、ゲートウェイプロキシアプローチが最も実用的なソリューションのままです。

お客様のエコシステム

考慮すべきもう 1 つの要因は、製造元のターゲット顧客ベースが Matter と互換性のあるスマートホームプラットフォームを使用しているかどうかです。そのセグメントのほとんどの消費者が Matter コントローラーまたは Matter 対応ハブとアプリを使用していない場合、製品を認証するインセンティブはほとんどない可能性があります。

例えば、高機能ユーザーのニーズへの対応に注力している企業は、Matter 管理者なしでシンプルなセットアップを顧客に提供している場合があります。または、DIY (do-it-yourself) ホームオートメーション愛好家は、カスタムソリューションを希望し、ブランド間で Matter の plug-and-play エクスペリエンスを必要としない場合があります。

ターゲット属性が Matter インフラストラクチャと連携しないシナリオでは、認証は明確な利点なしに複雑さを追加します。Matter コンプライアンスに労力を振り向けるのではなく、関連プラットフォーム内のユーザーエクスペリエンスの最適化にリソースを費やす方がよいかもしれません。

2026 年現在、Matter の導入は主要なエコシステム (Amazon Alexa、Google Home、Apple HomeKit、Samsung SmartThings) が標準を完全にサポートする重要な規模に達しています。Matter に対する消費者の認識が大幅に高まり、Matter ロゴは相互運用性の認識されたマークになりました。ターゲット属性の質問が「お客様は Matter を使用していますか？」から移行しました。「Matter をサポートしない余裕はありますか？」多くの市場セグメントでベースラインとなるため。

デバイスタイプがまだ定義されていません

Matter の範囲は最初のリリースから大幅に拡大しましたが、最も一般的なスマートホームカテゴリと多くのアプライアンスをカバーしていますが、一部のニッチな垂直領域は依然として標準化を待っています。

企業が既存の Matter プロファイルでカバーされていない一意のデバイスタイプを開発する場合、新しいプロファイルがドラフトされるまで認定はできません。これにより、Matter がその範囲を拡大するのを待っている間に、新製品の起動が遅れる可能性があります。

一部のメーカーは、イノベーションのリリースを控えるのではなく、独自の方法でより早くニッチなソリューションを市場に投入することを好むかもしれません。関連するプロファイルが成熟した後も、後で認証することは引き続きオプションです。先入れ先出しの利点として、場合によっては Matter を使用せずに direct-to-consumer 移行することをお勧めします。

代替方法: ゲートウェイでのプロキシ

エンドポイントデバイスに Matter の直接認定を妨げる制限がある場合、代替のアプローチは、ゲートウェイでデバイスの Matter 機能をプロキシすることです。ゲートウェイは、エンドポイントのローカルワイヤレスプロトコルと IP ベースの Matter プロトコルを変換するブリッジとして機能します。

例えば、独自の無線標準を介して通信する基本的な温度センサーは、引き続き Matter 管理者に Matter デバイスとして表示される可能性があります。ゲートウェイは非 IP インターフェイスでセンサーデータを受信しますが、そのデータを表す仮想 Matter エンティティを IP 経由でコントローラーに公開します。これにより、既存のハードウェアを使用し、ゲートウェイを通じて相互運用性のメリットを得ることができます。

もちろん、これによりデベロッパーの複雑さが増し、必要な翻訳レイヤーをサポートするゲートウェイが必要になります。ただし、直接認証がデバイス自体にとって難しすぎる場合は、実行可能な侵害である可能性があります。プロキシは、ハードウェアを完全に見直しなくても、低電力またはニッチなソリューションが Matter エコシステムに参加するのに役立ちます。

Matter ブリッジ仕様は成熟し、多数の認定ブリッジ製品が主要メーカーから利用可能になりました。これにより、ゲートウェイアプローチは Matter の初期の時代よりも実用的で標準化されています。メーカーはブリッジプロバイダーと提携したり、独自の認定ブリッジを開発して、エンドポイントハードウェアを再設計することなく、非 IP デバイスを Matter エコシステムに取り込むことができます。

Matter とのクラウド接続

Matter は基本的なローカルデバイスの相互運用性を実現しますが、堅牢なover-the-airによる更新、テレメトリデータ、リモート管理、独自のベンダーサービスとの統合を実現するには、追加のクラウド接続が必要です。デバイスメーカーには、Matter ゲートウェイハブの配送、世帯の Matter 認定ハブの使用、エンドポイントへの直接クラウド接続の統合などのオプションがあります。Matter-to-cloud 接続の標準が登場していますが、メーカーは引き続き追加の接続ソフトウェアスタックを Matter デバイスに統合する必要があります。診断や新機能の更新などの分野でスマートホームデバイスのフルバリューを実現するには、Matter メーカーは基本的なローカルオペレーションだけでなく、クラウド統合を検討する必要があります。

重要エンドポイントのクラウド接続による高度なデバイス機能の有効化

Matter 標準は、共通のプロトコルを通じてさまざまなベンダーの IoT デバイスを統合することを約束します。イーサネット、Wi-Fi、スレッドなどの IP ベースのネットワークテクノロジーを使用して、スマートホームデバイスがローカルネットワーク上で相互に検出、通信、相互運用する方法を指定します。このローカル相互運用性により、さまざまなベンダーの Matter 認定デバイスが、自動化されたシーンや音声制御などのアクティビティでシームレスに連携できます。ただし、Matter はクラウドインターフェイスを定義せず、デバイスエンドポイントのインターネット接続を必要としません。

現在、多くのスマートデバイスは、over-the-air (OTA) 更新、リモートアクセス、製造元プラットフォームとの統合など、主要な機能に追加のクラウド接続に依存しています。高度な機能を維持しながら Matter 準拠製品を構築しようとしているデバイスメーカーは、Matter をクラウド接続で補完することに関する設計上の考慮事項に直面しています。基本的なローカルコントロールと音声アシスタントの統合はシンプルな Matter デバイスでも機能しますが、より高度な機能を有効にするには追加のクラウド接続が必要です。

クラウド接続を必要とするユースケース

Matter はローカルデバイスの相互運用性を処理しますが、クラウド接続を追加すると、いくつかの重要なスマートホームデバイス機能が可能になります。

- Over-the-air (OTA) 更新 – インターネット経由でファームウェアとソフトウェアの更新を配信することで、ベンダーはデプロイ済みのデバイスを簡単に強化できます。OTA を使用しない場合、更

新は手動で処理されます。Matter 標準では、OTA 更新の処理方法と Matter 認定エンドポイントへの配信方法が説明されていますが、エンドポイントが接続されている Matter ハブでサポートされている機能によって異なります。さらに、エンドポイントに提供される更新には制限があります。たとえば、エンドポイントが更新をリクエストすると、利用可能な最新の更新のみが提供されます。同じタイプのすべてのデバイスには、単一の更新が提供されます。シーケンシャル更新や、更新の OTA ロールバックや削除を行うオプションはありません。エンドポイントでクラウド接続を有効にすると、OTA 更新のきめ細かな管理の欠如を軽減できます。Matter バージョン 1.4.2 (2025 年 6 月) では、OTA 更新メカニズムが強化されたトランスポートの信頼性とテストインフラストラクチャが改善されました。ただし、シーケンシャル更新とロールバック機能に関する基本的な制限が残るため、きめ細かな更新制御とフリート管理機能を必要とするメーカーにとって、クラウドへの直接接続は重要です。

- カメラストリーミングとメディア – Matter バージョン 1.5 (2025 年 11 月) では、Wi-Fi またはイーサネット経由のリアルタイムストリーミングプロトコル (RTSP) などのサイドチャネルプロトコルを使用したカメラサポートが導入されました。Matter はデバイス検出と基本制御を処理しますが、実際のビデオストリーミングは別々のプロトコルを介して行われます。これには、多くの場合、リモート表示、録画、および人物検出などの AI ベースの機能のためのクラウドインフラストラクチャが必要です。
- リモートアクセスと制御 – ホームネットワークの外部からリモートでデバイスにアクセスして制御するには、クラウドエンドポイントが必要です。Matter は、現在定義されているように、ローカルアクセスのみをサポートします。Matter エンドポイントはローカルネットワーク内のユーザーアプリで制御できますが、リモートコントロールは Matter ハブでサポートされている場合にのみ使用できます。それでも、通常は基本的なリモートコントロールのみを使用できます。
- テレメトリと診断 – エラーログやセンサーストリームなどのフィールドデータをクラウドに集約することで、ベンダーはデバイスのヘルスをモニタリングし、問題を特定できます。Matter は一般的な診断クラスターを通じて無線およびプロトコル関連の診断をサポートしていますが、製造元がデバイスからデータを取得できるように、デバイスに固有の詳細な診断にはクラウド接続が必要です。
- ベンダー固有の統合 – Matter 仕様で定義されていないカスタム機能とデータ型には、ベンダーのクラウドプラットフォームへの接続が必要です。これは、カメラ (Matter バージョン 1.5)、エネルギー管理デバイス (Matter バージョン 1.4)、アプライアンス (Matter バージョン 1.2~1.3) などの高度な機能を持ち、完全な機能のために製造元固有のクラウドサービスを必要とするデバイスにとって特に重要です。
- 外部統合 – Matter エコシステムやサードパーティー支払いゲートウェイ (ユースケースに応じて必要) がない音声アシスタントなどのサードパーティーサービスにリンクするには、Matter 管理者以外のインターネット接続が必要です。

これらの重要な機能はクラウド接続に依存しているため、Matter エンドポイントにはインターネットアクセスの追加オプションが必要になることがよくあります。

クラウド接続を有効にするアーキテクチャ

Matter デバイスの場合、ローカルオペレーション仕様を満たしながら必要なクラウド接続を提供する一般的なアプローチが 3 つあります。

ゲートウェイが組み込まれたスマートホームハブ

デバイスメーカーによっては、Matter 管理者とクラウドサービスへのゲートウェイの両方を組み込んだ独自のホームハブを出荷することを選択する場合があります。このホームハブは、アタッチされた Matter エンドポイントを標準に従ってローカルに管理し、高度な関数のクラウド接続を容易にします。ハブは、エンドポイントの OTA 更新、リモートアクセス、テレメトリ収集をサポートできます。

既存の Matter ハブへのクラウド接続をオフロードする

デバイスは、カスタムハブをバンドルするのではなく、Amazon Echo、Google Nest Hub、Apple HomePod、Samsung SmartThings Hub などの Matter ハブに接続してインターネット接続できるように設計されています。この場合、既存の Matter ハブは標準に従ってローカルデバイス通信を処理し、それを必要とするエンドポイントのクラウドへのゲートウェイも提供します。これは、コンシューマーが既に持っている可能性のあるインフラストラクチャを活用します。ただし、このアプローチは、標準で Matter ハブの標準として指定されていない機能について Matter ハブが提供するサポートのレベルによって異なります。

エンドポイントでの直接クラウド接続

Wi-Fi などの直接インターネット接続を備えたデバイスは、Matter ローカルネットワークとベンダークラウドサービス用に別々の接続を統合することができます。これにより、デバイスはクラウドへの独自のゲートウェイとして機能します。ただし、Thread などのプロトコルに依存する non-Wi-Fi エンドポイントにはソリューションが必要です。これにより、デバイスはクラウドに個別に接続できますが、シンプルで低コストのバッテリー駆動デバイスでは実現できない場合があります。

Bridging Matter と製造元のクラウドプラットフォーム

Matter はローカルの相互運用性を簡素化しますが、Matter 管理システムと製造元のクラウドプラットフォームをスムーズに接続するには、追加の労力が必要です。Connectivity Standards Alliance

(CSA) は、引き続き Matter-to-cloud 接続の標準を開発しています。2026 年の時点で、正式なクラウドインターフェイス標準はまだ進化していますが、何千もの Matter デバイスのデプロイから業界のベストプラクティスが浮上しています。このクラウド接続の標準を広く採用することで、デバイスメーカーの開発が容易になります。

最適な方法は、特定の製品のユースケース、料金ポイント、ビジネスモデルによって異なります。スマートホームコンシューマーが期待する完全な機能を引き出すには、ローカルの相互運用性に焦点を当てた Matter 準拠のデバイスであっても、クラウドサービスへの堅牢なアクセスが必要であることは明らかです。デバイスメーカーは、慎重に設計されたクラウド接続を通じて高度な機能を提供しながら、相互運用性のために Matter を使用する機会があります。

Matter 標準のセキュリティに関する考慮事項

設計によるセキュリティとは、開発の後の段階で後述するのではなく、デバイス設計段階でセキュリティ機能を組み込む方法です。暗号化通信と over-the-air (OTA) 更新は、設計上のセキュリティの例です。Matter は、信頼できる安全な製造施設からセキュリティを設計的に実装することで、スマートホームデバイスの強力な基盤を提供します。Matter デバイスは、信頼できる既知の製品認証機関 (PAA) 認証機関 (CA) の所有者のみが製造およびプロビジョニングできます。

Matter バージョン 1.5 以降、セキュリティフレームワークは複数のリリースを通じて継続的に強化されています。Matter 1.4.2 (2025 年 6 月) では、PSA ベースの暗号の改善が導入され、セキュリティ基盤が強化されました。Matter 標準を監督する Connectivity Standards Alliance (CSA) は、プロトコルのセキュリティ開示を管理するための専用の脆弱性報告プログラムを維持しています。

デバイス認証

Matter デバイスは、通信する前に相互に認証し、コントローラーに対して認証する必要があります。Matter ファブリックに接続できるのは、承認されたデバイスのみです。製造中、デバイスは一意の ID と、デバイス認証証明書 (DAC) と呼ばれる X.509 証明書でプロビジョニングされます。デバイスが Matter ファブリックに初めて接続しようとする、コミッショナーデバイスは DAC の有効性と、それが既知の信頼できる Product Attestation Intermediate (PAI) CA によって署名されていることを確認します。コミッショナーデバイスは、ネットワークに接続しようとするデバイスが Matter の仕様、プロトコル、およびセキュリティ標準に準拠しているかどうかを確認します。デバイスには、すべてのチェックが成功した場合にのみ Matter ファブリックへのアクセスが許可されます。

CSA は、認可された製品認証機関 (PAAs) のリストを維持し、分散コンプライアンス台帳 (DCL) を通じて公開します。DCL はブロックチェーンベースのシステムで、認定されたデバイスと信頼できる認証機関の透過的な改ざん防止レコードを提供します。製造元は、PAAs に申請したり、既存の認可された PAAs と連携してデバイスをプロビジョニングしたりできます。DCL は、利害関係者が認定エコシステムのモニタリングに使用できるオブザーバーノードもサポートしています。

暗号化された通信

Matter ファブリックへのアクセス権がデバイスに付与されると、デバイス間で渡されるすべてのデータは強力な暗号化によって保護されます。データの整合性は、多層アプローチを使用して保持されます。Matter コミッショナーは、ECC-256 secp256r1 曲線を使用してキー交換と署名の検証を実

行します。キーの交換後、Matter デバイスは AES-256 を使用して転送中のデータを暗号化します。メッセージごとに、デバイスは SHA-256 アルゴリズムを使用して、送信中にデータが改ざんされていないことを確認します。

Matter バージョン 1.4 では、Home Router Access Protocol (HRAP) を使用した拡張マルチ管理者機能が導入されました。これにより、デバイスが複数のエコシステムによって同時に制御されるシナリオのセキュリティが向上しました。この機能強化により、デバイスが複数の Matter™ に参加している場合でも、認証情報の共有とアクセスコントロールは安全に保たれます。各ファブリックは独自のセキュリティコンテキストを維持し、あるエコシステムの侵害が他のエコシステムに影響を与えないようにします。

無線通信経由更新

Matter 標準では、デバイスは over-the-air (OTA) 更新のための堅牢なセキュリティ体制を実装する必要があります。OTA は、デバイスが新しい機能とともにセキュリティ更新プログラムを受信できるように、スマートホームエコシステムの重要な部分です。Matter デバイスの各ファームウェア更新には、製造元のプライベートキーによる署名が必要です。デバイスは、対応する非対称パブリックキーを使用してペイロード署名を検証します。ペイロードの署名が確認されると、デバイスはイメージをブートローダーにコミットしてリセットできます。起動プロセス中に、デバイスはイメージを再度検証して改ざんされていないことを確認する必要があるため、また、既知の最新バージョンが実行されていることを確認します。

Matter バージョン 1.4.2 (2025 年 6 月) では、トランスポートの信頼性の向上やテストフレームワークの強化など、OTA 更新インフラストラクチャが大幅に改善されました。これらの改善により、本番環境のデプロイで OTA 更新がより堅牢で信頼性が高くなりました。ただし、製造元は Matter の OTA メカニズムには、シーケンシャル更新とロールバック機能に関する制限があることに注意してください。きめ細かな更新制御、フリート管理、ファームウェアの A/B テストを必要とするデバイスの場合、製造元は Matter の OTA を独自の更新インフラストラクチャへの直接クラウド接続で補完する必要がある場合があります。

Matter を使用した開発

Alexa の使用

Amazon は Matter 開発用の包括的なツールスイートを提供しています。これらのツールを使用すると、すべての主要なエコシステムと互換性があり、Amazon Alexa とシームレスに連携する Matter 製品を迅速に構築できます。

プログラム: Alexa と連携

このプログラムにより、Alexa に接続されたデバイスが優れたカスタマーエクスペリエンスを提供できるようになります。Works with Alexa (WWA) バッジは、顧客の信頼度を高め、認定されたデバイスの好みを高めるのに役立ちます。詳細については、「[Announcing Matter Launch and Introduction Works with Alexa \(WWA\) for Matter devices](#)」(Amazon ブログ記事) を参照してください。

SDK: Alexa で Matter を開発する

この SDK を使用すると、マネージドクラウド接続、ビジネスインテリジェンス、OTA サポートを含めながら、ローカル Matter 接続をデバイスに追加できます。詳細については、「[Alexa で Matter を最大限に活用する](#)」を参照してください。

キット: Alexa Ambient Home デベロッパーキット

このキットは、Alexa でアンビエントで統合されたスマートホームを構築するために、プロトコル間でデバイスと統合するのに役立ちます。詳細については、「[Amazon Alexa](#)」を参照してください。

エンドポイント: コミッシヨナブルエンドポイント

スキルに接続された Matter デバイスの場合、コミッシヨナブルエンドポイント API は、お客様がアクセス許可を持つ必要な手順なしで、Alexa デバイスへの Matter ベースのローカル接続を作成します。詳細については、「[Alexa.Commissionable Interface 1.0](#) (Alexa Skills Kit)」を参照してください。

AWS Private CA Matter のサポート

AWS Private Certificate Authority (AWS Private CA) は Matter 標準の使用に関するガイダンスを提供します。

Matter の DAC

Matter には、デバイス認証証明書 (DAC) が必要です。DAC は、Matter パブリックキーインフラストラクチャ (PKI) 証明書ポリシー (CP) に準拠するデバイス認証 CA によって発行される必要があります。デバイスベンダーは、AWS Private CA を使用して以下を実行できます。

- Product Attestation Authority (PAA) 認証局 (CA) をホストする
- Product Attestation Intermediate (PAI) CA をホストする
- 各デバイスの DAC を発行、署名、維持する

詳細については、AWS セキュリティブログの「[を使用して Matter のデバイス認証証明書を発行 AWS Private Certificate Authority する](#)」を参照してください。

ノード運用証明書 (NOC)

デバイス認証に加えて、Matter ファブリック内の通信を保護するために使用されるノード運用証明書 (NOCs) の発行 AWS Private CA をサポートします。AWS は、NOC のルート CA と下位 CA をアクティブ化し NOCs を作成するための Java サンプルを提供します。

詳細については、AWS Private Certificate Authority ドキュメントの [AWS Private CA 「API を使用して Matter 証明書を実装する」](#) を参照してください。

CRL 失効サポート (Matter バージョン 1.2 以降)

Matter バージョン 1.2 では、証明書失効リスト (CRLs)。Matter 証明書を発行する CAs に対して CRL 失効を有効にする場合は、`CrlDistributionPointExtensionConfiguration` 構造内の `CrlConfiguration` オブジェクト `true` で `OmitExtension` に設定します。Matter では、CRL ディストリビューションポイント (CDP) URI は証明書に埋め込まれず、代わりに Matter Distributed Compliance Ledger (DCL) から取得されます。DAC 検証中に検出するには、CDP URI を Matter DCL にアップロードする必要があります。

Matter のインフラストラクチャ

AWS は、[を使用して Matter の PKI インフラストラクチャ AWS Cloud Development Kit \(AWS CDK\)](#) を設定する例を示します。Matter PKI CP の要件を満たす AWS Private CA ために [を使用して](#)。詳細については、GitHub の「[Matter PKI CDK project](#)」を参照してください。

Java サンプル

AWS Private CA は、Matter 準拠の製品認証機関 (PAA) 証明書、製品認証中間 (PAI) 証明書、およびデバイス認証証明書 (DACs) を作成するための Java サンプルを提供します。詳細については、AWS Private Certificate Authority ドキュメントの [AWS Private CA 「API を使用して Matter 標準を実装する \(Java の例\)」](#) を参照してください。

Matter PKI コンプライアンスガイド

この [Matter PKI コンプライアンスガイド](#) では、CSA Matter PKI CP 要件への準拠を実装し、実証する方法について説明します。を使用して Matter 準拠の認証機関 (CAs) AWS Private CA を作成および運用する方法に関する情報を提供します。

と のマネージド統合 AWS IoT Device Management

[AWS IoT Device Management](#) には、マネージド統合機能が含まれています。この機能は、接続タイプ (直接、ハブベース、cloud-to-cloud) に関係なく、多様な IoT デバイスをオンボーディングおよび管理するための統合インターフェイスを提供します。

Matter に関連する主要な機能を次に示します。

- ZigBee、Z-Wave、Matter、Wi-Fi プロトコルをサポートする Device SDKs
- Matter データモデル標準の AWS 実装に基づく 80 を超えるデバイスデータモデルテンプレート
- パートナー構築の cloud-to-cloud (C2C) コネクタ
- 複数のブランドとプロトコルにまたがる統一されたデバイス制御
- カナダ (中部)、欧州 (アイルランド)、中東 (アラブ首長国連邦) の各リージョンで利用可能

詳細については、[「マネージド統合とは」を参照してください AWS IoT Device Management。](#)

Matter 標準に関するFAQs

Matter のメンバーシップレベルを教えてください。

メンバーシップ情報は [CSA ウェブサイト](#) で確認できます。選択するメンバーシップレベルは、製品の認証 (アダプター) または標準内の製品タイプの定義 (参加者) に対する関心によって異なります。メンバーシップレベルの詳細については、CSA ウェブサイトの「[Impact the Future of the IoT](#)」を参照してください。

スマートホームコンシューマーは Matter からどのようにメリットを得ますか？

コンシューマーは、以下の点で Matter の恩恵を受けます。

- 拡張セットアップフロー、マルチデバイス QR コード、NFC オンボーディング (Matter バージョン 1.4.1) など、ホームでの Matter デバイスのオンボーディングを簡素化
- 主要なエコシステム (Amazon Alexa、Google Home、Apple HomeKit、Samsung SmartThings) 全体で 1 つのアプリによるすべてのスマートホームデバイスの統合管理
- 拡張マルチ管理者 (Matter バージョン 1.4) による複数の音声アシスタントからの同時デバイス制御
- ストリーミング、アプライアンス、エネルギー管理デバイス、ロボットバキュームを備えたカメラなど、拡張されたデバイスタイプへのアクセス

詳細については、このガイドの「[スマートホームコンシューマー向けの Matter 認定のメリット](#)」を参照してください。

デバイスメーカーは Matter からどのようにメリットを得ますか？

デバイスメーカーは、以下の点で Matter の恩恵を受けます。

- インフラストラクチャと接続の問題があるお客様をサポートするためのコストの削減
- 各エコシステムで複数の証明書を使用するのではなく、デバイスの 1 つの証明書
- 基本的なデバイス機能に独自のアプリケーションの開発が不要になりました
- インフラストラクチャ要素 (スレッドボーダールーターなど) を出荷する必要がないため、マテリアルのコストを削減

- インフラストラクチャと接続の問題があるお客様をサポートするためのコストの削減
- 成熟SDKs、開発ツール、テストインフラストラクチャへのアクセス (初回リリースから大幅に改善)
- 確立された認定プロセスと拡張されたテストプロバイダーネットワークにより、time-to-market

詳細については、このガイドの[「デバイスメーカーの Matter 認定のメリット」](#)を参照してください。

Matter は Wi-Fi、Bluetooth、または Thread を置き換えますか？

いいえ、Matter は IP ネットワークで実行されるアプリケーションレベルのプロトコルです。接続に Wi-Fi、イーサネット、または Thread を使用するデバイスは Matter 認定を取得できます。次の表は、Matter と Wi-Fi、Bluetooth、Thread のコントラストをまとめたものです。

機能	Matter	Wi-Fi	Bluetooth	スレッド
目的	スマートホーム通信	インターネットアクセスとデータ転送	短距離ワイヤレス通信	低電力ワイヤレスメッシュネットワーク
Range	基盤となるプロトコルによって異なります	最大 300 フィート	最大 30 フィート	最大 300 フィート
[帯域幅]	基盤となるプロトコルによって異なります	1 秒あたり最大 10 ギガビット	1 秒あたり最大 2 メガビット	1 秒あたり最大 250 キロビット
消費電力	基盤となるプロトコルによって異なります	比較的高い	比較的低い	非常に小さい
セキュリティ	基盤となるプロトコルによって異なります	WPA2, WPA3	AES、BLE セキュア接続	AES

Cost	デバイスによって異なります	比較的安価	比較的安価	比較的高価
------	---------------	-------	-------	-------

ベンダー ID と製品 ID とは

CSA メンバーは、サプライヤーとして識別するベンダー ID を申請できます。今後、会社の製品はこの ID に割り当てられ、そのオリジンまでさかのぼることができます。さらに、一意の製品 ID を受け取ります。16 桁の数値コードは、パスポート番号などの製品に付属しており、ベンダーと区別できません。

Matter 認定が必要なデバイスはどれですか？

Matter ファブリックの認証が必要で、その一部であるデバイスには Matter 認定が必要です。ただし、非標準 (専有) プロトコルを介してベンダー指定のハブとのみやり取りするように設計されたデバイスは、Matter 認定プロセスからメリットを得ません。例えば、スマートホームセキュリティシステムハブは Matter 苦情として認定されている必要がありますが、ハブと通信するドアまたはウィンドウセンサーは Matter 準拠として認定されている必要はありません。Matter の認定製品を取得する選択は、主にこの考慮事項によって決まります。

私の製品タイプは現在 Matter で定義されていません。Matter 認定を受けるには、どのような追加タスクに予算を立てる必要がありますか？

Matter では、バージョン 1.0 から 1.5 までのデバイスタイプのカバレッジが大幅に拡張されました。標準は、以下を含む 50 を超えるデバイスタイプをサポートするようになりました。

- コアデバイス: 照明、スイッチ、プラグ、ドアロック、サーモスタット、ウィンドウカバー、センサー
- アプライアンス: 家具、冷暖房、皿洗い機、ロボットバキューム、マイクロ波、オーブン
- エネルギー管理: ソーラーパネル、バッテリー、ヒートポンプ、給湯器、EV 充電器
- 環境: 水管理デバイス、空気品質センサー、空気フィルター
- セキュリティ: ストリーミングをサポートするカメラ

デバイスタイプがまだサポートされていない場合、最初のステップは参加者として CSA に参加することです。Matter は、新しいバージョンを年に約 2 回リリースし、デバイスタイプのカバレッジを継続的に拡大しています。参加者メンバーとして、新しいデバイスタイプの定義を主導し、より迅速な go-to-market 戦略を可能にするドラフト仕様にアクセスできます。メンバーシップレベルの詳細については、CSA ウェブサイトの「[Impact the Future of the IoT](#)」を参照してください。

一部のデバイスは、ホーム Wi-Fi ネットワークに直接接続します。 これらのデバイスは Matter 認定を受けている必要がありますか？

Matter 認定は、Matter ファブリックに接続できるため、スマートホームネットワークに直接接続するデバイスにとってメリットがあります。これにより、コンシューマーは同じ Matter ファブリック上の仮想アシスタントを介してデバイスを制御できます。ただし、コンシューマーは、ベンダー固有で Matter 仕様で定義されていないオペレーションには、デバイス固有のアプリケーションを使用する必要があります。

Matter の最新バージョンと新機能

2025 年 11 月現在、Matter 1.5 が最新バージョンです。最新バージョンの主な追加点は次のとおりです。

- Matter 1.5 (2025 年 11 月): RTSP によるカメラストリーミングのサポート、安定性の向上
- Matter 1.4.2 (2025 年 6 月): BLE コミッショニング、PSA ベースの暗号化、トランスポートの信頼性を改善
- Matter 1.4.1 (2024 年 11 月): セットアップフローの強化、マルチデバイス QR コード、NFC オンボーディング
- Matter 1.4 (2024 年 11 月): エネルギー管理デバイス、拡張マルチ管理者、HRAP
- Matter 1.3 (2024 年 5 月): アプライアンス、EV 充電器、拡張エネルギーレポート
- Matter 1.2 (2023 年 10 月): 冷暖房、冷暖房、皿洗い機、ロボットバキューム

Matter バージョンは、CSA 作業グループによって年に約 2 回リリースされます。

リソース

AWS リソース

- [Alexa で Matter を最大限に活用する](#)
- [Matter デバイス用の Matter Launch and Introduction Works with Alexa \(WWA\) の発表](#) (Amazon Alexa ブログ)

IoT 用 Connectivity Standards Alliance (CSA)

- [CSA ウェブサイト](#)
- [CSA 認定プロセスの概要](#)
- [CSA 認定テストプロバイダー](#)
- [Matter の仕様](#)

ドキュメント履歴

以下の表は、本ガイドの重要な変更点について説明したものです。今後の更新に関する通知を受け取る場合は、[RSS フィード](#)をサブスクライブできます。

変更	説明	日付
Matter 標準バージョンの更新	最新の Matter 標準バージョン 1.5 に関する情報を含めるように更新	2026 年 3 月 6 日
初版発行	—	2024 年 2 月 5 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。